

シリーズ 私の一冊の本

国際関係学部 藤巻光浩 先生

エドワード・W.サイード著 村山敏勝 三宅敦子訳 『人文学と批評の使命』

閲覧室 1 階 902/ Sa 17 岩波書店 出版

近年、日本の大学では教養教育を復活させる動きが活発化している。この教養教育は、はたして専門化をさらに推し進めることを前提とした言語能力の養成とリンクした教養教育、つまり専門化のための通過点に過ぎないのだろうか。

古代ギリシアから脈々と続いてきた「教養教育(パイディア)」は、現在、決して細分化される専門教育のためのものではなく、地球上に生きることを総合的に考える市民教育そのものである。表面的なコミュニケーションの習得を目指す言語教育や、専門家の視点だけを反映する排他的な知識産出は、本来人文学を基盤とする教養教育とは関係がない。エドワード W. サイードは、「専門」化されすぎた学術領域の編成に対して厳しい目を向ける。

出版される前にサイードが亡くなったため、本書は事実上の遺稿となる。数ある彼の著作の中で本書を紹介する理由は、「人文学」という黴臭く聞こえる領域のあり方を再度見直すための知見にあふれ、「教養教育」全般について考え直す契機に溢れるためである。

人文学とは、テキストの解釈を通じ「一つの領域、人間経験の一つの分野から別の分野への翻訳」をおこない、「(知識の) 一部を他の部分とつなげ、注意を払う領域を広げて、適切性の範囲を拡大」してゆくことである。しかし、これは単に解釈の方法を変化させるという単純な作業ではない。自分自身の立つ場所、歴史を再考し、目に見えない人々への想像力を養うものである。サイードは以下のように述べる。「わたしたちの時代とわたしたちの国がつねに変わることなく象徴しているのは、ここに定住する人々だけではなく、定住せぬ人々、(中略) 宿無しの亡命者、移民、放浪し虜囚となる人々の、資料に残らぬ激動の生である。」何者も排除しない市民教育は、細切れになりがちな専門化を乗り越え、再度、知識を有機的に紡ぎ上げて行く作業を求めている。知の改編が謳(うた)われて久しいが、20 世紀後半から米国社会に警鐘を鳴らし続けた知識人の声に再度耳を傾ける必要がここにある。